２０２３・３・５　　黄金井尚美　主任牧師

＜牢に響いた賛美＞

使徒１６：１９～２５

第２回宣教旅行。海を渡ってマケドニアのピリピへやって来たパウロ達。
これはパウロの計画にはなかった事。

ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、
「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください」と懇願するのであった。【９節】

最初に向かった町、ピリピでおこったこと
　占いの霊に取りつかれている女奴隷がパウロたちに付きまとった。

投獄されたパウロとシラス
　二人は、計画を立てて行けるような場所ではない、「牢へ遣わされた」と
　とることもできた。しかも、彼らが投獄されたのは、奥の牢。
　ここでパウロとシラスは、主に神に祈りつつ賛美の歌を歌った。

この命令を受けた看守は、ふたりの奥の牢に入れ、
足に足かせを掛けた。真夜中ごろ、
パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を
歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。
【２４、２５節】

◆奥の牢で、パウロとシラスはどんな祈りをささげたいたのだろうか？

◆祈り、賛美をささげならが、その胸には十字架に架かられたイエス様が迫っていた。

◆パウロとシラスの祈りと賛美に聞き入っていた囚人達。獄舎は「一つ」にされていた。その証拠に・・・・？
　囚人たちは誰も逃げなかった。そして・・・看守は救われた。

イザヤ書61章　「賛美の外套」ということば。

神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の樫の木、栄光を現す主の植木と呼ばれよう。

イザヤ６１：１～３

◆「油注がれた者」メシヤ・キリストが来られる。
そうなればこれが実現する。イエス様ご自身が故郷ナザレで安息日に会堂で、イザヤ書６１章の言葉を読んだ。

イエスは人々にこう言って話し始められた。
「きょう、聖書のみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」ルカ４：２１

「賛美の外套」は、イエス様を信じる主のしもべ達に与えられている。